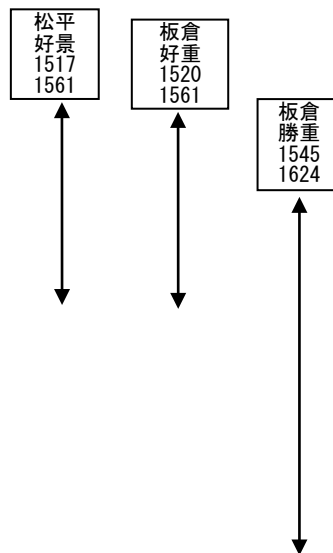


善明堤の戦い

善明堤（ぜんみょうつつみ）の戦いは、1561（永禄4）年に三河の豪族松平氏当主松平元康（後の徳川家康）と三河の名族吉良義昭との間で起った戦い。今川義元の戦死後独立した家康の三河統一事業の過程で起きた戦の一つである。

1561年4月15日、吉良義昭は一計を案じ、富永忠元に数百騎を授け、酒井忠尚の守る城、上野城（豊田市）を攻めさせた。家康から指示を受けた松平好景は、康忠と嫡男伊忠を出撃させ、深溝城へ戻った。その隙を突いて、吉良義昭は中島城を攻めた。好景はすぐに留守の一族・家臣僅か50余騎を率いて、中島へ向かった。散々に敵を蹴散らした後、敗走する吉良軍を追撃した。しかし、吉良方の忠元は軍を返し、吉良軍を追撃する好景を挟み撃ちにし、好景の退路を断った。吉良領で、好景は伏兵に行く手を遮られ、吉良勢に囲まれた。勇戦して、敵中を切り抜け中島へ戻ろうとしたが、好景はじめ一族の者21人、家臣等34人全員倒れ、生還する者はなかったという。この場所は後に鎧ヶ淵古戦場とも呼ばれるようになった。好景が討たれた場所は、善明堤の近くの西尾市下永良町鎮守である。そこには、下永良陣屋があった。「善明堤の戦い」は明治40年から「鎧ヶ淵の戦い」と呼ばれるようになった。鎧ヶ淵には後年、吉良上野介が堤防を構築し、その堤防を「黄金堤」と呼んでいる。

- 明応年間 1491～1501
- 永正年間 1504～1521
 - 永正年間 中島城築城
- 大永年間 1521～1528
- 天文年間 1532～1555
- 永禄年間 1558～1570
 - 1560 桶狭間の戦い
 - 1561 善明堤の戦い
 - 1563～1564三河一向一揆
 - 1570 姉川の戦い
 - 1572 三方ヶ原の戦い
 - 1575 長篠の戦い
- 大正年間 1873～1892
- 慶長年間 1596～1610
- 寛永年間 1624～1644



鎧ヶ淵古戦場の碑
20150818



鎧ヶ淵古戦場案内 20150818

鎧ヶ淵古戦場
20150818

鎧ヶ淵古戦場：西尾市善明町





松平好景の碑案内 1922(大正11)年建立 20150818



松平好景の碑 1872(明治5)年建立 20150818

下永良陣屋跡：西尾市下永良町鎮守20

【松平好景（1517～1561）】

松平好景（まつだいら よしかげ）は、戦国時代の武将。松平忠定の子で、深溝城主。又八郎、大炊助と称す。子に長篠の戦いで武田信実を討った松平伊忠がいる。松平忠定を祖とする深溝松平家の2代目である。善明堤の戦いで敵を深追いし、敵方の伏兵に包囲され討死した。彼の首は向野首塚に埋められている。なお、没年については弘治2年（1556年）説もある。

深溝松平家の菩提所は本光寺（額田郡幸田町深溝内山 17、JR 東海道本線三ヶ根駅下車徒歩 10分）にある。

【富永忠元（1537～1561）】

富永忠元（とみなが ただもと）は、戦国時代の武将。吉良義昭の家老で伴五郎と称される。富永氏は伴氏の後裔で設楽郡富永荘の領主である。東条吉良氏の譜代の家臣であり、代々室城主を務める。桶狭間の戦い後に起きた松平元康との一連の抗争で度々功名を立て、敵からも「勇将」と呼ばれる。1561（永禄4）年4月15日の善明堤の戦いでは四部隊として上野城を攻めた。室城の留守部隊は松平好景の退路を遮断、吉良義昭の本隊と挟み撃ちにして壊滅させている。合戦後、東条城へ入城。味方の西尾城が落ち、東条城が包囲されると出戦を主張。9月13日、手勢を率いて東条城の西方、藤波礮に出撃し本多広孝・酒井正親らの部隊と戦い戦死した（藤波礮の戦い）。

【酒井忠尚（生没年未詳）】

酒井忠尚（さかい ただなお）は、戦国時代の武将。松平氏（徳川氏）の家臣で、三河上野城主である。通称は将監。酒井康忠の子で、酒井忠次の叔父にあたるといわれているが、関係などは諸説あって定かではない。松平広忠の時代から松平氏に仕えた重臣であり、広忠没後は松平元康（徳川家康）に仕えたが、自立傾向が強くて松平氏から離反することも少なくなかった。1563（永禄6）年の三河一向一揆でも、一揆方に与して元康に反逆し、上野城に籠城した。しかし一揆が鎮圧されると元康の追討を受けた忠尚は、上野城から逃亡して駿河に逃れたといわれ、その後の行方は不明である。

【参考】

善明堤の戦いは、1560年の桶狭間の戦いによる今川義元の敗死後、織田信長と同盟を結んだ岡崎城主松平元康（徳川家康）が、西三河の制覇を目指して西三河の今川勢力を駆逐する過程で、元康配下の深溝（ふこうず）松平大炊助好景と、今川方の東条城主吉良義昭が1561年4月15日、中島城（岡崎市中島町）から鎧ヶ淵（西尾市吉良町岡山）で激突し、吉良勢の伏兵に遭った好景は敵中を切り抜けて脱出したものの、善明の西の原の丹過（西尾市下永良町鎮守）で補足され、44歳で戦死したとされている。

このことは、好景の孫・家忠の直系の孫に当たる忠房（1619～1700）が、1641年12月に幕府へ提出し、1643年9月に将軍家光へ上程された「寛永諸家系図伝」の深溝松平系図で、好景の戦死を

1561年4月15日と記していることが元になっている。また、家忠の五男・忠隆の子・忠冬（1624～1702）が、1511年から1616年までの徳川家草創の歴史を編年体で著述した「家忠日記増補」（1663年ごろ成立）にも、同様に記されている。

一方、好景の孫・主殿助（とものすけ）家忠の日記である「家忠日記」の1578（天正6）年3月4日に、好景の23回忌の追善供養の記事があり、逆算すると1556（弘治2）年に没した可能性が高いということである。深溝松平氏の宗旨である曹洞宗の追善法要は初七日から33回忌まで13回の法要があり、25回忌が一般的ながら23回忌を行った例もあるそうである。「孫が祖父の年忌を間違えるわけがない」との主張も成り立つ。

このほか、善明堤の戦いを1556年とする史料としては、比較的早く成立した編さん物である「松平記」があり、1556年4月としている。また、吉良側の史料である「養寿寺本吉良系図」の「義安」の項も1556（弘治2）年としている。

当時の三河を見ると、1549年に安城城を尾張織田氏から奪取した駿河今川氏は、三河各地で検地を行うなど領国化を進めた。これに対して1555年ごろに三河国内で今川氏に対する反乱が多発した。青野松平氏、大給松平氏、作手奥平氏、長篠菅沼氏、牛久保牧野氏、上野酒井氏、そして吉良氏という東西三河の広範囲に及ぶ反乱で、「弘治合戦」とも呼ばれています。このうち、上野酒井氏と吉良氏を除く諸氏は一族が今川方と反今川方に分裂して抗争していた。

松平氏は加茂郡松平郷（豊田市松平町）に発祥して以降、十四松平と呼ばれる庶家が分立して栄えたが、宗家の地位をめぐる一族内の対立があった。駿河今川氏の後援を得て宗家の地位を固めた松平広忠が1549年に家臣に殺されて嫡子・竹千代（徳川家康）が今川氏の人質になると、庶子家の中には動揺が広がり、中には今川直臣として出仕する者も現れた。その典型が、のちに吉良荘東条に進出して東条松平氏を起す青野松平氏であった。

青野松平氏は岡崎市上青野町にいた庶家である。当主の甚二郎が1551年、今川氏への逆心を見せたため、その弟の甚太郎忠茂がこれを今川氏に報告するとともに、兄・甚二郎を尾張国に追いはらった。以後、忠茂は今川直臣として大給城の戦いや村木砦の戦いに転戦した。また、青野松平氏の本領は饗庭（あいば＝西尾市吉良町饗庭）だったらしく、1551年当時、饗庭を実効支配していた東条吉良氏と鋭く利害が対立していたことが分かっている。

深溝松平氏はどうかと言うと、好景は1554年2月9日付で、子・連忠（のち伊忠）と連署で菩提寺である深溝の本光寺に寺域周辺の下地（地頭などが持つ実際の土地の支配権）を寄進している。同年の10月14日には今川義元が本光寺に寺領を安堵して同寺を守護不入の地（国の守護使の検断などを拒否できる地）とする安堵状を与えている。今川氏が深溝松平氏の菩提寺の寺領を安堵していることから、深溝松平氏も今川氏の従属下にあったと考えられる。

吉良氏は宗家が吉良荘西条（旧西尾市・旧一色町）、庶家が吉良荘東条（旧吉良町・旧幡豆町・岡崎市南部）を支配していたが、1546年以降の駿河今川氏による三河進攻に際し、宗家が尾張の織田氏に加担したため、今川氏によって1549年9月に西尾城が攻略される。今川氏はこの反逆を主導した家臣を肅清することで、吉良宗家の当主をそのまま西条に置いたようである。弘治年中（1555～1557）の吉良宗家の当主は義安であった。1555年10月、義安は再び今川氏に反逆した。義安は弟・長三郎（詳細不明）を緒川（東浦町）の水野氏に人質として送って加勢を求め、水野氏の軍勢が西尾城に入ったが、今川氏の軍勢は直ちに西条領に乱入し、吉良荘内をことごとく放火して200人余りを討ち取った。1557年10月には今川氏家臣が西尾城で在番していることから、義安は駿河に連行されて幽閉され、西条領は今川氏の直轄領になったと考えられる。

このように、1556年当時は松平氏が今川方、吉良氏が反今川方に分かれており、1561年の松平氏と吉良氏とは正反対の側にあって対立していた。

善明堤の戦いの舞台の一つが中島城のあった中島郷であるが、中島郷は東条吉良氏の支配下にあったようで、家臣の由良氏が領主だったとされている。由良氏は子孫が持つ系譜類によると、鎌倉初期に三河国守護だった安達藤九郎盛長の子孫という名家で、室町時代後期の文明年中（1469～1486）に吉良家の旗下になったが、吉良義昭と松平元康の間が不和になり、深溝松平好景に滅ぼされたと記されている。

好景に滅ぼされた由良氏当主について、系譜類では「孫八郎家定」「平八郎家宗」「孫八郎重光」と混乱している。戦死の年号については一部に「1556（弘治2）年春」とするものがある。実は1549年9月に今川氏が西条吉良氏を攻撃するに当たり、降伏を勧告する矢文を送っているが、その中で、今川氏が織田氏討伐のために、渡・筒針に出向いた時に、吉良氏が兵を安城城に移したこと、お

よび、その後に、中島を「奪補」した時も、兵を行路半ばまで出したことを非難する箇所がある。ここにある「中島」は中島郷を指すと思われる、渡・筒針の戦いは一般的に1547年9月28日のこととされているので、この中島奪補の戦闘は1547年から1549年9月の間に発生したことになる。また、前述した今川義元が本光寺に与えた安堵状には、中島郷にある寺領について「領主の寄進状に任せて」安堵すると記されていることから、1554年の時点ですでに今川氏は吉良氏に替って中島郷の土地を支配していたことになる。中島郷の土地を寄進した「領主」とは由良氏のことではないかと思われる。そうだとすれば、由良氏が松平好景に滅ぼされたのは、1556年春ではなく、前述の通り1547年から1549年9月までの間で、「春」という文言にこだわれば、1548年春か1549年春ということになる。1548年だとすれば、3月19日の小豆坂の合戦や4月15日の耳取縄手の戦いとの関連が考えられそうである。このように、好景による中島城主由良氏の攻略は、松平宗家と行動を共にする今川方の、反今川陣営だった吉良氏への軍事行動と考えられる。

その後の中島城は今川方の板倉弾正（だんじょう）が入ったとされているが、弾正は謎の人物で系譜が不明である。史料上では実名が康忠で、今川氏から渥美郡細谷郷（豊橋市細谷町）を与えられていたことが分かっている。1561年春ごろに中島城を松平氏に追われ、岡城（岡崎市大平町）に入城したものの、そこも攻撃を受けたので作手に逃れ、1562年9月29日の八幡（豊川市八幡町）合戦で今川方として松平氏と戦い、戦死したと伝わっている。

実は由良氏子孫所有の一部系譜類には、弾正が好景に滅ぼされた「由良宗家」の子だとしているものもあり、真偽は不明ながら由良氏と板倉氏が親戚関係なのは事実らしい。すると、1548年ごろに中島城が落ち、由良氏が没落した後、中島城には今川家臣の好景が入っていたが、1556年に織田方の吉良氏と争って戦死したので、今川氏が城を回復したのちに今度は今川家臣で、かつ由良氏とも血縁関係に当たる板倉弾正が替わって入城したと整理できると考えられる。善明堤の戦いは1561年か1556年かを、時代背景を詳細に考察してきたが、結果はどちらも十分成立しうることが判明しただけで、いずれが正しいかを決することができない。





本項は以下の資料を引用している。

[六ッ美南部の歴史・文化を紐解く]

著者 岡崎市立六ッ美南部小学校 高須 亮平
 発行日 2012 (平成 24) 年 3 月 31 日 初版発行
 印刷所 ブラザー印刷株式会社

[わたしたちのふるさと 六ッ南 114 選]

監修者 総代会長 平井 良美
 社教委員長 近藤 武美
 著者 岡崎市立六ッ美南部小学校 6 年児童 114 名
 (平成 25 年 3 月 19 日卒業)
 編者 岡崎市立六ッ美南部小学校 6 年担任
 権田 康成、加納 隆、坂井 純、榊原 美佐子、山本 佳愛
 発行日 2013 (平成 25) 年 3 月 1 日 初版発行
 印刷所 ブラザー印刷株式会社
 製本 ブラザー印刷株式会社
 発行 岡崎市立六ッ美南部小学校